

平成30年度推薦入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部教養学科

受験番号

氏名

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、解答用紙、本冊子表紙上部記入欄に、受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

草稿用紙は、白紙2枚とする。

本冊子

表紙 1枚

課題 5枚

終了後にすべて回収する。持ち帰らないこと。

小論文課題

第一問

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

(一) 傍線部(一)で言われている女子学生の疑問とはいかなるものか、また筆者はそれにどのように応答したかを説明しなさい。

(二) 傍線部(二)で言われている「希望」とはどのようなものか、この文章の趣旨に沿って説明したうえで、それに対するあなたの考えを具体的な事例や経験に触れながら述べなさい。

忍耐と希望

1

昨年ついでの春、京都の大きい寺院で行われた「全戦没者追弔ついで法会」という集まりで講演しました。戦争で死んだ——敵、味方というのじゃない、兵士であった、普通の市民だったという区別もしない——すべての人たちをいたむ法会、という考え方に共感してのことです。私は仏教の信者ではありませんから、この集まりが行われた宗派の寺院の名前も書かないことにします。

講演の最後に、私は「子供のためのカラマーゾフ」として書いた、アリョーシャの演説のことも話しました。それにつないで読んでいただきたいのですが、私はこういうことをいったのです。

〈自分たちはいま、パレスチナの人たちとヨコにつながらなければならないと思う、と私がいいです。それを聞いてくださった皆さんが、さらにテレビや新聞ほかでいろんな情報を取りいれて——インターネットを活用される人もいるでしょう——考えをかため、その上で、友達にこういうとします。

——パレスチナ人の苦しさということを、自分の苦しさとして受けとめなくてはならない、そういう問題なんだと思うよ。

それを聞いた人たちのなかには、あなたを笑う人がいるかも知れません。そうでなくても、こういうことを正面からいうのは勇気のいることです。

この国で、たとえば私がテレヴィイに出て次のようにいたします。エドワード・W・サイードという、文学や文化の優れた理論家がいる。パレスチナ人のかれは苦しんでいる。イスラエルという強大な軍隊を持つ国と、それに抵抗して自分らから奪い取られた(サイードは、土地をふくめていろんな権利をまるごと奪い取られたというのだけれど)ものを取りかえしたい、と主張している人たちと、その両者の、いま現にある争いを、具体的にどう解決するか、その道がよく見えていいるのではない。かれ自身として大きいヴィジョンを持つているが、パレスチナ側の指導者たちにも、それを説得することはなおできていない。

サイードは、パレスチナの側の「自爆テロ」にたいして、ずっと反対を言い続けて来た。数日前、十八歳のパレスチナ人の少女の「自爆テロ」が行われて、もちろん彼女は死んだし、多くのイスラエルの市民が傷ついた。サイードは、それを肯定しないけれど、おそろく誰より深い苦しみとともに、

——しかしこの出来事がなければ、世界は、ここで行われていることについてよく知ることはなかっただろう、といっている。

そのように苦しみながら、解決策を探そうとし、現在あることを世界に訴え続けているサイードという人と、自分は肩を組みたい……

それをテレヴィイで見ている人たちのなかには、日本の小説家になにができる、と笑う人がいるだろうと思います。そのとおり。しかし、そのように勇気をだしていることが必要だ、と私は思うのです。アリョーシヤの演説のなかにはありましたが、ほくは世界のすべての人のために苦しみたい、と少年が叫ぶ。それはおかしいことはおかしい。それでも、子供になにができるだろう、とせせら笑うことが、正しいだろうか？ 笑われてもいい、と勇気を出して、自分は世界の人のために苦しみたい、という子供がいることに、私は希望があると思います。)

京都の寺院では、仏像を中心に作り出された、お坊さんたちや信者の方たちの祈りをさげられる大きい場所で、話をするようになります。子供の時にお寺で感じた、恐ろしいほどおごそかな気持が思い出されて、私はずっと緊張していたのです。

その後で、やはり寺院のなかですが、国際会議も開くことのできるホールに場所を移して、講演を聞いてもらった中学生、高校生、そして韓国や中国からの留学生たちをふくめた、若い人たちとのシンポジウムをしました。私はいくらか緊張からときはなたれて、若い人たちの発言に、自由な感想をのべることができました。

それに続けて、フロアからの質問があったのですが、私にはひとりの女子学生——大学生だと思っています——からの質問に、しっかり答える必要がありました。彼女の質問の前置きにされている、私の講演の、彼女としての受けとめ方に、誤解をとおきたい部分があったからです。私は、アメリカやドイツで講演をする場合、質問と答えの時間がゆつくりとつてあることが好きでしたが、それはまず誤解をとおいて、お互いに理解を深めることができるやり方だからです。

その女子学生は、ニューヨークのテロの後、アメリカがアフガニスタンを攻撃し、日本もふくめて、世界のいろんな国がそれに協力してきたことを自分がどう考えているかを話しました。空爆によって多くの被害者が出たことを批判する人がいることも知っている。これからのアフガニスタンの復興に、日本が役にたつことができるのは嬉しい。

とくに、アフガニスタンを強く支配していたタリバンという勢力が、攻撃を受けて多くの都市から後退した。これまでタリバンの方針で自由な教育を受けられなかった女性たちが、明るい生活に向かっていている。それは、これまで言葉だけでタリバンとその政権を批判して来た人たちに、できなかったことじゃないだろうか？

(-) 女子学生はそういいながら、私への疑問も示していたわけです。つまり、私がアメリカの大規模な空爆と戦闘が破壊したものについて、やはりそのようなやり方ではない方法を、アメリカと、日本をふくめた世界じゅうの国々が考えることが必要じゃなかっただろうか、と話したことへの、疑問です。

文章を書いたり、講演をしたりしているだけでは、アフガニスタンの女性が顔をおおっていないならなかった、ブルカという布を取らせることもできなかったじゃないか？ そういうことです。

私はこの娘さんのいわれたことを受けとめました。私のような日本人の、またヨーロッパ、アメリカの、文章を書いたり講演をしたりする人間が——女子学生は「知識人」という言葉を使いました。私もこの一連の文章で自分としての定義をしています、実際の役にたたないという指摘は、そのとおりだと思います——自分たちのやれなかったことを自覚する必要があります。その上で、もっと平和的に、遠い未来を見わたしながらやってゆけないか、という言葉を発しつづけたと思います。

しかし私は、娘さんが、あの十八歳の「自爆テロ」がなければ、世界じゅうの報道がパレスチナに起こっていることをあれほど大きくは取り上げなかったろう、ということについて、サイドも私も、あの悲惨な出来事の力を認めている、と受けとっていられたのに、決してそうではない、と説明したのです。

サイドが「自爆テロ」についてずっと反対し続けてきたことはいいました。今度の場合も、十八歳の少女の「自爆テロ」の痛ましさは、サイドが深く傷ついているのはいうまでもありません。その上で、この出来事なしでは、世界のマスコミが、パレスチナで行われている不正、悲惨をいまのように大きく報道はしなかったらう、と暗い心でいつているのです。

とくによく思い出していたきたいのは、サイドが、ニューヨークのテロの背後の指導者とされるビンラディン一派を、徹底して否定していることだ、と私は続けました。サイドは、アラブの人間はじつに多くの考え方を持っているが、それらのなかでこの一派の思想と行動はかたよったものであり、将来へのまじめな展望を持たない、とテロの直後から批判しているのです。

私も、ビンラディン氏がヴィデオ映像で話していること、あの大きい「自爆テロ」の実行者たちは、かれらの信仰する神に心から迎えられる、という考えとはまったく別のものとして、十八歳の少女の行動があつたはずだ、と思います。

少女の遺書には、パレスチナの指導者たちやかれらとともにいる男たちが、本当に現実を動かすだけの働きをしていない、そこでかれらに反省をうながすために自分のできることをやる、と書いてありました。あの少女は、宗教的な確信から死んだのではない。これから地上で生きる人たちのやるべきことを考えたのです。サイードはなにより彼女のような若い人にこそ、生き続けて、パレスチナの明日のために働いてもらいたかった、と辛く苦しい思いを抱いているだろう……

東京に帰ってすぐ、やはり寺院での講演を聞かれたという、イスラエル人の若い母親から手紙が届きました。あなたは、パレスチナの子供たちが習う教科書を読んだことがあるだろうか？ 恐ろしい教科書で育った十八歳の少女が、テロを行ったのだ。イスラエルにいる自分の両親は、パレスチナ人のテロにおびえながら暮らしている。イスラエルに帰れば、自分も子供も同じことだ。あなたがサイードの意見に同調されているのを残念に思う。あらためて私は、サイードの、あの出来事への感じ方はこうなのだ、と説明する手紙を書きました。自分はサイードの暗く激しい心の痛みにつながることをねがって、いまわが国のパレスチナ報道から人間らしい感情の表現は姿を消しているなかで、話をし、文章を書いているものべました。

私があの子学生にも、イスラエル人の若い母親にも——私の小説もよく読んでいられる研究者です——、そしてこの文章を読んでくださった皆さんにも、もう一度いいたいことがあります。

サイードはすばらしく整理された複雑さと深さとで、私たちが生きているこの世界、この時代の、文化と国際情勢を分析してきました。そして、このこと自体は、また別のものですが、永年の友人として私の心にもあるのは、かれが白血病と闘っていて、毎年、困難な治療を受けている人でもある、ということなのです。

そのサイードが、パレスチナとイスラエルにどのような和解の道がありうるか、世界の誰にも見通しのつかないなかで、ねばり強く主張しつづけているのは、日本のマスコミがそんなに単純なことをいっているのか、と冷やかな態度を示しそうな——笑いまではしないで——、それだけにさらに切実に感じられるねがいなのです。

さきの寺院での講演の直後に、インターネットで手に入れてもらったものですが、カイロの新聞に載ったサイードの文章にこういうところがあります。

〈このもつとも困難な時に、私たちが現在の危機について何を理性的に学び、何を未来への私たちのプランにふくみこむことができるか。それが問題なのだ。〉

〈イスラエルの排外主義と好戦性に対する、私たちの答えが、「共存」である。それは譲歩することではない。連帯を作り出すこと、それによって、排外主義者、差別主義者、そして（たとえばビンラディン一派のような）ファンダメンタリストたちを孤立させることなのだ。〉

文章の結びはこうです。

「パレスチナ人として、私たちは自分を抹殺しようとしてくる試みすべてを生き延びた。そのヴィジョンと社会とを保っている。そして、それにこそ意味があるのだ。そこから出発して、批評的に、理性的に、希望と忍耐をもって持続することこそ、私の子供たちとあなたの子供たちの世代のためになる。」

若い人たちに、と思いながら訳しましたが、難しい言葉使いになりました。しかし、サイドがパレスチナの子供の、そしてイスラエルの子供の、さらに皆さんをふくむ世界のすべての子供の世代のために、ねがいをこめていすることは感じとっていただけだと思います。

そして私はサイドに自分の作品を読んでもらっている人間として、もうひとつ個人的につけ加えたいのです。

私の小説で、最初に翻訳された長編は、『個人的な体験』でした。それは光が生まれてきた経験をもとに書いたものです。若い父親が、障害を持って生まれた子供の受けとめ方を思いなやみ、苦しみ、どこかへ逃げ出そうと考えたりもしたあげく、やっとその子供と一緒に生きて行こう、と決心します。

その上で、若い父親が、「忍耐」という言葉を思い浮かべるシーンを私は書きました。英訳では、サイドのエッセイと同じ *forbearance* が、小説全体の最後の単語となっています。

この小説を書いた時、私は実生活でも、知的な障害を持つている子供と生きてゆくことを決心していました。そのために必要な力が「忍耐」だ、とも感じていたわけです。そして四十年近くがたち、いま光は私の家庭の中心です。私が小説やエッセイとして書いてきた作品のすべてが、かれとの共存がなければ——サイドは、*coexistence* という言葉を使っています——、なりたたなかつたはずですが。

(二)

そして私はあの時、忍耐ということだけ考えていたのですが、いま希望がそれと一緒にあったことにも気付くのです。この一連の文章を読んでくださった皆さんは、ここに書いた文章の多くに、光と生きてきたことが私と家族にもたらした充実と喜びとを、感じとってくださいませ。私はサイドが、そこから出発して、批評的に、理性的に、希望と忍耐をもって続ける働きの、将来の明るさを信じます。

光は私らに音楽を贈ってくれました。サイドの子供たちの世代が、父親たちの苦しみの時をつぐなうために贈りかえしてくれるものが、美しく、励ましにみちたものであることを、どうして信じない理由があるでしょうか？

出典 大江健三郎『「新しい人」の方へ』、二〇〇三年

以上

東京大学教養学部

出典：朝日新聞出版刊 発行年月日：二〇〇三年九月一九日 見出し：『新しい人』の
方へ』二〇〇三年、忍耐と希望 大江健三郎氏著
承諾番号：一八一―二三九〇

朝日新聞出版に無断で転載することを禁じます。

平成30年度推薦入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部学際科学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、解答用紙上部余白、本冊子表紙上部記入欄
に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

草稿用紙は、白紙2枚とする。

本冊子

表紙 1枚

課題 1枚

終了後にすべて回収する。持ち帰らないこと。

東京大学教養学部

小論文課題

2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals)では、2030年までに達成をめざす17分野が示されている。このうち、学際科学科に関係の深いものとしては、目標7(エネルギー)、目標10(各国内および各国間の不平等の是正)、目標11(持続可能な都市)、目標12(持続可能な生産と消費)、目標13(気候変動)、目標14(海洋資源)、目標15(陸上資源)などがあげられる。これらの目標(17目標に入っていれば、上であげた目標以外でも良い)からあなたの関心のあるものを1つ取り上げ、どのような問題が現在起きているのかを説明しなさい。

その上で、そうした問題の解決につなげるために、あなたが学際科学科でどのように学ぼうと考えているか、入学後の計画について、具体的に詳しく述べなさい。

以上

東京大学教養学部